



都おどり (小町踊)

大正時代

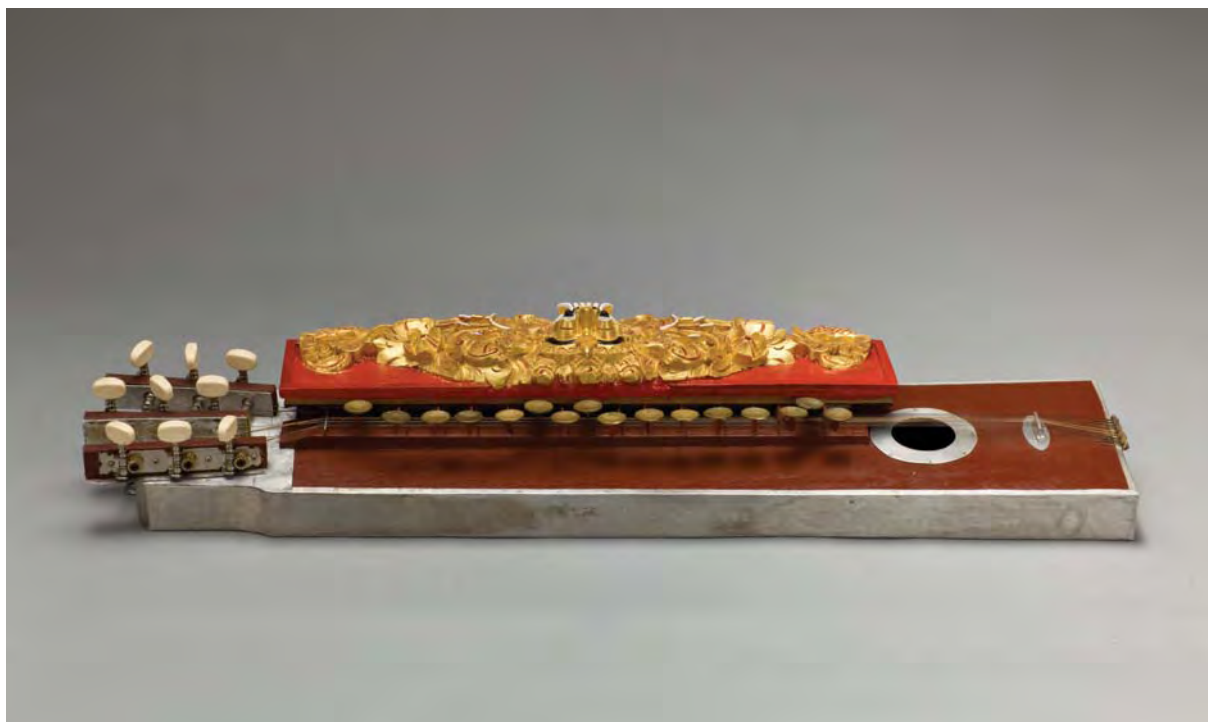
110 mm × 80 mm × 235 mm / 170 mm × 170 mm × 215 mm
明和年間から続く京都の老舗人形店の丸平大木人形店において、大正年間に製作された人形。丸平大木人形店の当主は、代々大木平蔵を名乗っているが、これは四世大木平蔵（1860-1939）の時代に製作されたものと考えられる（現当主は七世大木平蔵）。2体の人形を一組として作られたものであり、江戸時代の京都で流行した小町踊を表現している。小町踊は、手櫛（たすき）に鉢巻姿という格好をした7、8歳の女子が、七夕の日に団扇太鼓（うちわだいこ）を手にして街を練り歩くというもの。腰を落とした左側の人形も本来は太鼓を持っていたはずだが、その太鼓は残念ながら失われてしまっている。京都教育大学教育資料館には、丸平大木人形店の製作にかかる人形が、ほかにもいくつか伝わっており、いずれも歴史・風俗を示す教材として購入されたのだろう。



<表>

<裏>

団扇太鼓



プンティン penting

インドネシア（バリ島東部） 2009年
 626 mm × 188 mm × 77 mm

バリ島東部のカラングASM県周辺で用いられる弦楽器。音階ボタンを介して金属弦を押さえ弾奏する日本の大正琴は、1912（大正元）年に名古屋の森田吾郎が発明したもので、その後、アジア各地に伝わり改良が加えられたが、プンティンは、そうした大正琴由来の弦楽器の、バリ島ヒन्दウー集落における名称である。イ・ワヤン・ライ氏によって 2009 年に製作された。古い 50 ルピアコインを用いた音階ボタン 16 個が 9 本の弦に付くが、地域によっては、壊れたタイプライターのキーをそのまま音階ボタンに使用している場合もある。天板の彫刻は、装飾目的で施されたもので楽器との関連はなく、また、ネック部分はギターのそれを転用し、ピックは浜辺に打ち上げられていた亀の甲羅から作られている。胡坐をかいた演奏者が、音階ボタンを上にしてギターのように抱え、左手で音階ボタンを操作しながら、右手に持ったピックで演奏するもので、声楽アンサンブル「ゲンジェツ」の伴奏や器学合奏に使われる。



天板に施された装飾



ルピアコインを用いた音階ボタン



ピック

今月の逸品

NO.04 2015.07

京都市伏見区深草藤森町1
 ☎ : 075-644-8840/8175
 ✉ : manabi@kyokyo-u.ac.jp



MUSEUM OF EDUCATION



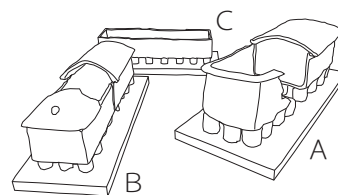
陶棺

古墳時代後期

A : 222 cm × 82 cm × 73 cm

B : 173 cm × 48.5 cm × 51 cm C : 157 cm × 43 cm × 28 cm

古墳時代後期（6世紀～7世紀前半）に造られた土製の棺。Aは青谷古墳（城陽市中芦原）から、B・Cは芝12号墳（長岡京市井ノ内頭本・向井芝）から出土した。石製の石棺に比べて軽量の陶棺は、古墳の小型化に伴って広まり、主に近畿地方や吉備地方の古墳から見つかっている。凸帯の亀甲式模様をめぐらすことに特徴のあるAは、京都府師範学校の全学徒が、陸軍傷痍軍人療養所（現・南京都病院）の敷地整地作業に従事していた1938（昭和13）年9月に、偶然発見されたもので、大学の歴史を物語る資料としても貴重である。刀子1点、大刀2点、須恵器の破片も出土したとされる。Aが土師質であるのに対し、BとCは硬質の須恵質で焼成されている。失われたCの蓋を想定すればBとCはほぼ同じ大きさとなる。出土した芝12号墳は13基ほどで構成される芝古墳群の中の1つであるが、古墳の多くは破壊されて現在では見る事ができず、B・Cはかつて乙訓中学校（現・向日市立勝山中学校）に保管されていたものである。破損の甚だしかったCは、2015（平成27）年6月に修復された。



< 出土地・地図 >



トウヨウゾウの臼歯化石（レプリカ）

約 50 万年前

250 mm × 100 mm × 85 mm

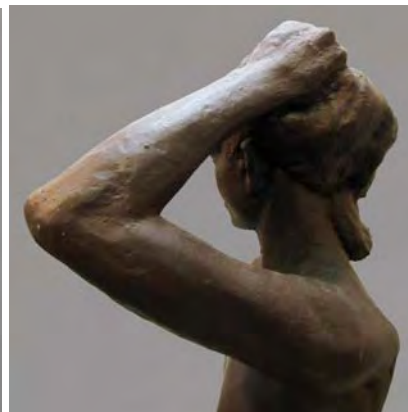
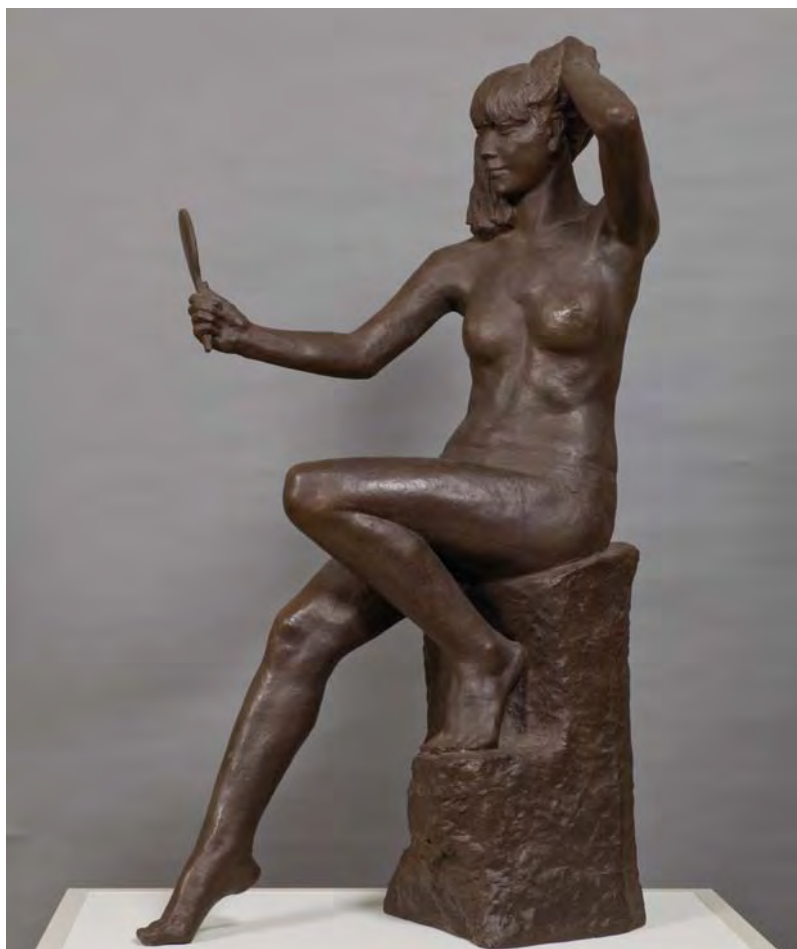
京都市伏見区深草鞍ヶ谷の粘土採掘場で 1966 年に発見された、ゾウ類右上顎第二大臼歯の化石。分類上はトウヨウゾウ (*Stegodon orientalis*) とされる。中国南部、重慶市近くの洞窟より見つかった臼歯化石が模式標本で、オリエントリスとつけられたその種名から、日本ではトウヨウゾウとよばれている。更新世中期（60 万～ 40 万年前）に中国から日本へ渡ってきて生息した、原始的なゾウの仲間であることがわかっている。京都教育大学周辺の丘陵地には、大阪層群という淡水成粘土層（河川氾濫原の湿地や沼沢地に堆積した地層）が分布するが、これが見つかったのが、この地域の大阪層群に挟在する“アズキ火山灰層”（大分県付近を噴出起源とする、およそ 80 万年前の火山灰層）より後の地層であることや、他の地域との地層対比などを基に、およそ 50 万年前の化石と考えられている。深草周辺の湿地や沼沢地に水をもとめて歩いていた様子が想像される。京都の竹林や筍畑の地下には、酸性土壌をつくるこの地層が分布していることが多いが、もしかすると、今後、筍とともにトウヨウゾウの化石が見つかるかもしれない。なお実物標本は、京都大学総合博物館に収蔵されている。



トウヨウゾウ化石産地（北東から南西を見る）1966.8.2

(左)：『京都府レッドデータブック』2002 年

(右)：『京都府レッドデータブック下 2002 地形・地質・自然生態系編』 撮影：石田志朗氏



写真：松田尚之氏

手鏡を持つ娘

制作者：松田尚之（1898-1995）第11回日展出品
1979（昭和54）年
40 cm × 55 cm × 113 cm F.R.P

1962年から72年まで、京都学芸大学（後に京都教育大学と改称）の教授として学生の指導にあたった松田尚之の作品。「彫刻は表面をつくることではなく、内部の骨格、構造をつくることだ」との信念から作られた松田の作品は、いずれも力強く、重厚で量感があり、魅力的である。「手鏡を持つ娘」と題されたこの作品は81歳の時に制作されたものだが、その年齢を感じさせないほどに瑞々しく、若き女性の生き生きとした生命を見事に表現している。左手で髪を掻き揚げ、顔を少し下げながら手鏡を見る姿は、自然な姿ではある。脚に動きを加えるなど全体の構成がよく考えられており、伸びやかでおおらかな動勢を感じさせる。力強さの中に潜む人間の優しさが、女性の仕草と表情からも伝わってくる。それはしっかりとした骨格と動きによるものである。鏡を見て何を考え、何を思っているのかと想像したくなるほど造形力があり、完成度の高い松田の代表作といえよう。なお、松田が死んだ翌年の1996年に、これを含めて20点が京都教育大学へ寄贈された。

今月の逸品

NO.07 2015.10

京都市伏見区深草藤森町1

☎ : 075-644-8840/8175

✉ : manabi@kyokyo-u.ac.jp



実用植物図 第二十～第二十五

外寸：55 cm × 51 cm

本紙：15.1 cm × 21.5 cm (6枚)

実用作物を示した掛図。緑色の紙で覆ったコルク状のボードに6枚の図を貼り、右端に紐を取り付けて掛図に仕立てている。貼られた図の年代などは不明だが、京都教育大学が所蔵する他の生物教育掛図が、いずれも明治30年代に掛図に仕立てられたものであることを考えると、そのころに出版されたものだろう。図には、第二十から第二十五までの番号が付されている。第十九までの図に何が描かれていたかは不明だが、少なくとも、当時の採油用、染色用、嗜好品などの実用植物の代表的な種類を知ることができる。図は薄く着色され、第二十三(右下)には桑畑、第二十五(左下)にはコルク層を剥いている様子も描かれている。第二十三にはチャとコーヒーの木がみえるので嗜好飲料の図と思われる、同じ図に描かれる桑も、養蚕の他に桑茶として用いられたのかもしれない。第二十五には、今はあまり使われない工芸材料としてのタケ、コルクやい草の材料植物が描かれている。実用作物の図を教育掛図にしている点からは、自然を生活の共同体と捉えようとする当時の生物教育のあり方がうかがうことができる。

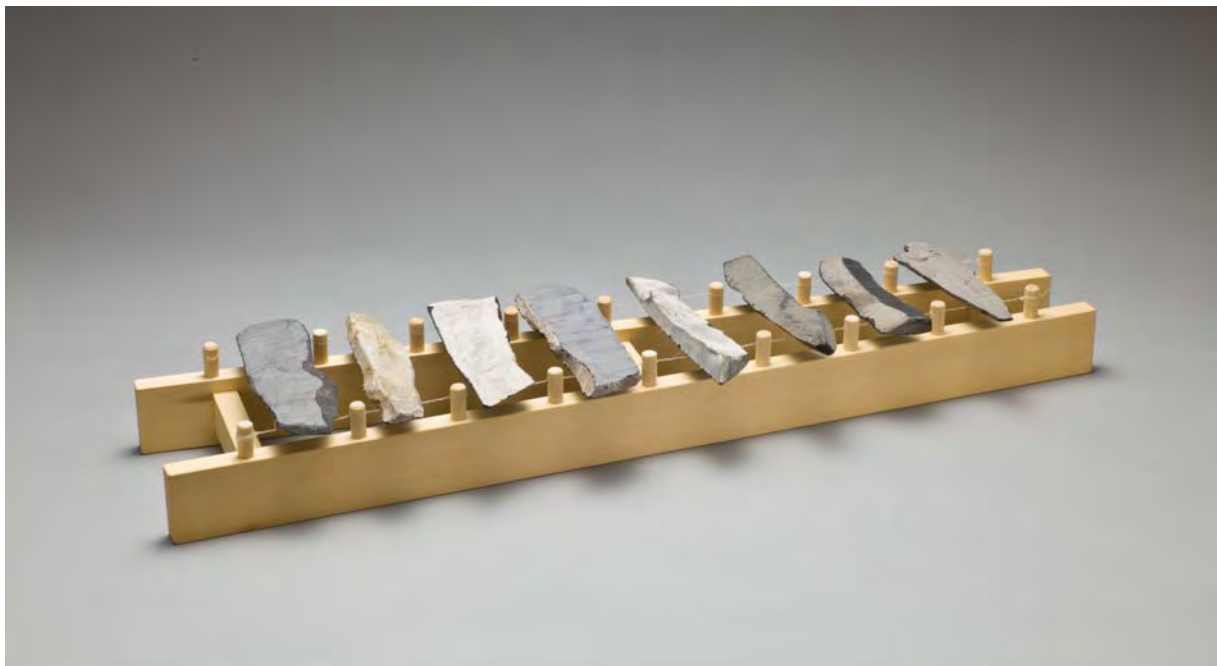


(左下)：第二十五 各種用植物三
一 こるくのき
二 苦竹(まだけ)
三 燈心草(とうしんぐさ)

今月の逸品

NO.08 2015.11

京都市伏見区深草藤森町1
 ☎ : 075-644-8840/8175
 ✉ : manabi@kyokyo-u.ac.jp



石琴（サヌカイト）

80 cm × 19 cm × 9.5 cm

サヌカイトを用いて作製された石琴。石琴とは、岩そのものや板状に加工した岩を並べ、それを打ち鳴らして演奏する楽器のことで、有名なものとしては、37本の鍾乳石を使って作られたアメリカヴァージニア州のものがある。京都教育大学が所蔵する石琴では、板状に加工されたサヌカイトを8本、木琴のように丈夫な糸の上に並べ、ドレミファソラシドの音階を出すようになっている。サヌカイトは、香川県（讃岐）坂出市国分台や大阪府と奈良県とにまたがる二上山で採取される安山岩の一種で、その硬さは鉄以上であり、たたいた時の音からカンカン石ともいわれる。その音色の美しさから楽器としても利用され、1964年の東京オリンピックの開会式に使われたことでも有名である。この資料は、サヌカイトを専門に扱う香川県高松市の業者「扇誉亭」から購入した。石琴を用いて演奏している様子は、学校現場の補助教材として京都教育大学が提供しているWEB教材「授業のたね」（音楽・身近な音具たち）を通して見聞きすることができる。

http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/taka/main_page.html



WEB教材「授業のたね」



装束標本全

明治 41 (1908) 年

男 : 145 mm × 85 mm × 350 mm / 女 : 115 mm × 115 mm × 315 mm
 中等学校の教材として明治末年に販売された装束の標本。実物の約 5 分の 1 であらわされた男女の人形に、各種の装束を着用できるようになっており、これに解説書 1 冊が付属する。芳賀矢一 (東京帝国大学文科大学教授) ・高橋健児 (東京帝室博物館学芸委員歴史部次長) ・関保之助 (同服飾調度調査主任) の校閲のもと、武谷等が撰じたもので、付属品は人形師の松雲齋加藤徳山が手がけた。撰者の武谷が高等女学校の教諭だったことから、主に女子の中等教育を念頭に置いて作成されたのだろう。女房正装・男官装束 (文官束帯・武官束帯・雑袍) ・召具装束 (水干・狩衣・直垂) の 3 種 7 類の装束が含まれている。解説書によれば、室町・江戸時代の装束に依拠しつつも、それ以前の様子を知る階梯となることが目指されたようである。



太刀



靴



<表>



<裏>

和扇

今月の

逸品

NO.10 2016.01



MUSEUM OF EDUCATION



「雪中梅」

平成 6 (1994) 年
額 : 890 mm × 650 mm × 46 mm

第 33 回日展への出品作「清流」で、平成 15 (2003) 年に日本芸術院賞を受賞し、平成 24 (2012) 年に芸術院会員となった井茂圭洞の作品。京都教育大学を退官する際に、その記念として大学へ寄贈されたもので、『万葉集』にある山部赤人の歌を題材としている。井茂の作品の特徴は、渴筆と潤筆の対比によって、かな本来の伝統美を表現することにある。この作品においても、かな作品の大切な要素の一つである流麗美が、いかに表現されており、格調の高さがうかがえる作品といえよう。また、空間意識の高さも井茂の作品の特徴で、要白(余白)の美を重んじ、紙面の上部および左辺に広い空間をとることで、明るい作品に仕上がっている。凛とした緊張感を漂わせる書線の表現、特に「し」の書線には、井茂の思いがこめられている。



日本芸術院賞・内閣総理大臣賞 受賞作品「清流」



日本芸術院賞 授賞式